

## 青年の友人関係および集団活動への関わり方と 自我同一性との関連

### The Relationship between Identity and Friendship, Group activities

堀 岡 園 子

#### 【問題】

青年期は、自分自身に対する関心が高まるとともに、人格的共鳴や同一視をもたらすような深い友人関係を持つことを通して新たな自己概念を獲得し、健康な成熟が促進される時期である(西平、1973、1990)。青年にとって必要な友人を選択し、個と個の深い付き合いを求める友人関係は、青年期後期に大きな質的転換を遂げ、特に親友と呼ばれる親密な友人が出現することが青年の心的発達において重要な存在となる。

友人関係が果たす機能について松井(1990)は、緊張や不安、孤独などの否定的感情を緩和・解消する存在としての「安定化機能」、対人場面での適切な行動を学習する機会となる「社会的スキルの学習機能」、友人が自分の行動や自己認知のモデルとなる「モデル機能」の3点を挙げ、友人関係が個人の精神的安定や成長に影響を与える存在であることを述べている。しかし近年、青年の友人関係の希薄化が指摘されており、友人から低い評価を受けないように警戒したり、互いに傷つけ合わないよう表面的に円滑な関係を志向する傾向(上野・上瀬・松井・福富、1994；岡田、1995)や青年の他者への配慮の欠如や関心の低さ(橋本、2000；中園・野島、2003)が注目されている。岡田(1993)は、大学生の友人関係のあり方に関する調査を行い、表面的で快活

な関係を迫りし群れる「群れ」、互いに傷つけあわぬように気を遣う「気遣い」、互いの領域に踏みこまぬよう関係の深まりを回避する「ふれあい回避」の3つの特徴を明らかにしている。さらに、橋本(2000)も大学生の交友関係について「表層群」、「積極群」、「内向群」、「無関心群」の4群を見出しており、対人関係に気を遣う表層群および積極群より、対人関係にあまりコミットしない無関心群および内向群の方が相対的に適応的であることを明らかにし、他者へのコミットの低減という現代青年の対人関係の特徴が、現代社会への適応方略として採用された可能性を示唆している。以上のような友人関係を築く現代青年の個人内および社会的な適応については今後検討が必要であると考えられる。

また、青年期は友人とインフォーマルな関係を形成する一方で、学校のクラブやサークル、地域の諸団体などフォーマルな集団との関わりを自発的に形成していくようになる。特に青年期後期は、クラブ・サークル活動やアルバイト、ボランティア活動など、青年期前期・中期のような学級内のグループ活動とは異なる目的に基づいて形成された集団に所属するようになる(難波、2003)。宮下・大野(1997)は、大学生の集団への関わり方と自我同一性との関連について、大学生活に密着して比較的身近にある集団よりも、本人のより強い意志で自ら選ぶことが求められる集団に

属している者は自我同一性の感覚が高いとしている。また、近田（1983）は、クラブ活動に参加している大学生を対象に、アイデンティティ・ステータスとクラブ内の対人関係との関連やクラブ活動が青年の自己確立にどのような影響を与えているかについて検討し、許容的な雰囲気をもつ芸術関係のクラブは自我を緩め、再統合する場となり、体育系のクラブでは上下関係の中で自分の役割を学んでいることを明らかにしている。

つまり、青年期後期における大学生は、多様な社会的集団に所属し、役割体験を通じて心理社会的な自己確立を進めており、集団における活動は自己の発達に影響を与えると考えられる。しかし、集団活動に対する参加意欲や動機については明らかにされていない。

さて、エリクソン（1950）は、誕生から生涯にわたる発達を8段階の漸成的発達図式にまとめ、自我同一性（ego identity）理論を提唱し、青年期の発達課題として「自我同一性対 自我同一性拡散」という概念を提唱している。自我同一性とは、幼児期以来形成されてきた様々な同一性や自己像が青年期に取捨選択され、再構成されることによって成立する、斉一性・連続性を持った自我の確立状態である（谷、2001）。このような斉一性や連続性の感覚を持つことが青年にとって重要であるとされている。ところが、大学に進学する青年はそれ以外の進路を選択する青年に比べて同一性探求を長時間にわたり体験し、また後に引き延ばす傾向がある（下山、1983；Kroger、2000）とされており、青年期後期にあたる大学生にとって周囲との関わりや体験を通して自我同一性感覚を得ることは精神的健康や将来への見通しにとって重要であると考えられる。

また、対人関係を築くためには、対人関係を適切に調整し維持するための基本的な技能、いわゆる社会的スキルが必要とされている。丹波・小杉（2006）は、大学生を対象に

社会的スキルがライフイベントに及ぼす影響について調べ、社会的スキルを持つことで社会的ネットワークが広がり、ライフイベントが多様化することを明らかにしている。さらに、青年が対人関係を深化させないのは主体的に望んでいるわけではなく、スキルの欠如に由来することがこれまで指摘されている。これらの研究から社会的スキルを身につけることは大学生の自己成長の場を広げ、社会との適応的な結びつきを促進すると思われる。

## 【目的】

本研究では、現代青年の友人関係と自我同一性の発達との関連について明らかにすることを第1目的とし、先行研究から友人関係尺度項目を収集し、新たな友人関係尺度を作成した上で、友人関係の類型化を行い、大学生の友人関係のあり方と自我同一性の感覚、社会的スキルについて検討する。

次に、社会的文脈の1つとして集団活動に注目し、集団活動のあり方の類型化を行い、集団活動のあり方と大学生の自我同一性の感覚、社会的スキルについて検討をすることを第2目的とする。

## 【方法】

### (1) 調査方法および対象者

2007年10月中旬から下旬に、札幌市内の大学生451名を対象に無記名による質問紙調査を行った。調査は複数の講義で集団実施し、講義時間内にその場で回収した。本研究の有効回答数は396名（男性152名、女性244名、平均年齢19.65歳、SD=1.05）であった。本調査の結果は、卒業論文作成の為にのみ用いられ、個人の情報が外部に漏れることは一切ないことを説明した上で回答を求めた。

**(2) 質問紙の構成****① 基本属性 (性別、年齢)****② 友人関係尺度**

現代の大学生の友人関係を把握するため、友人関係尺度・内省尺度 (岡田、1993)、友人関係態度尺度 (中園・野島、2003)、友人関係の希薄さ尺度 (白川、2006) から、本調査で適切と思われる 34 項目を選び、友人関係尺度を作成した。「最も親しい同性の友人との関わり方についておたずねします」という教示を行い、それぞれの項目について「全くあてはまらない」から「非常にあてはまる」までの 7 件法で回答させた。

**③ 集団活動に関する尺度****A. 集団活動の種類**

「現在最も力を入れている活動についておたずねします」という教示で、「大学内での部活動・サークル」「大学外でのサークル・習い事」「アルバイト」「ボランティア」「その他」「参加していない」の 6 つのうち、1 つを選択させた。

**B. 活動への積極的関与度**

「集団活動に参加している」を選択した対象者に対して「その活動にどの程度積極的に関わっていますか」という教示で、「非常に積極的」から「非常に消極的」までの 4 件法で回答させた。

**C. 集団への関わり方尺度**

集団への関わり方を把握するため、宮下 (1998) の全 18 項目からなる集団への関わり方尺度を用いた。「選択された集団への関わり方についてお尋ねします」という教示で、それぞれの項目について「非常にそう思う」から「全くそう思わない」までの 5 件法で回答させた。

**④ 多次元自我同一性尺度**

青年期における自我同一性の感覚を把握するため、谷 (2001) の多次元自我同一性尺度を用いた。全 20 項目について「全くあてはまらない」から「非常にあてはまる」までの 7

件法で回答させた。

**⑤ 社会的スキル尺度**

菊田 (1988) の社会的スキル尺度 Kiss-18 のうち仕事に関する 3 項目を削除した 15 項目を用いた。「いつもそうでない」から「いつもそうだ」までの 5 件法で回答させた。

**【結果】****1. 各尺度の構造および信頼性の検討****(1) 多次元自我同一性尺度の因子構造**

本尺度の因子構造を検討するため、全 20 項目に対して主因子法、プロマックス回転による因子分析を行った。因子負荷量、40 以上であること、複数の因子に、30 以上の負荷がまたがっていないこと、因子の解釈可能性を考慮し、17 項目 4 因子構造 (累積寄与率 67% :  $\alpha = .88$ ) を採用した。

第 1 因子は「過去において自分をなくしてしまったように感じる (逆転項目)」、「いつのまにか自分が自分でなくなってしまったような気がする (逆転項目)」など自己の時間的連続性や不変性の感覚を示していることから、「自己斉一性・連続性 ( $\alpha = .87$ )」因子とした。第 2 因子は「現実の社会の中で自分らしい生活が送れる自信がある」、「現実の社会の中で、自分らしい生き方ができると思う」など社会と自分自身との適応的な結びつきの感覚を示していることから、「心理・社会的同一性 ( $\alpha = .83$ )」因子とした。第 3 因子は「自分がどうなりたいたいのかはっきりしている」、「自分が何を望んでいるのかわからなくなることがある (逆転項目)」など自己についての明確さの感覚を示していることから、「対自的同一性 ( $\alpha = .79$ )」因子とした。第 4 因子は「自分のまわりの人々は、本当の私をわかっていないと思う (逆転項目)」、「人に見られている自分と本当の自分は一致しないと感じる (逆転項目)」など他者からみられている自分と本来の自分が一致しているという感覚を示している

ことから、「対他的同一性 ( $\alpha = .79$ )」因子とした。

以上4因子17項目からなる尺度を多次元自我同一性尺度とした(表1参照)。

## (2) 友人関係尺度の因子構造

本尺度の因子構造を検討するため、フロア効果のある1項目を除いた友人関係尺度33項目に対して、主因子法、プロマックス回転による因子分析を行った。因子負荷量、40以上であること、複数の因子に、30以上の負荷がまたがっていないこと、因子の解釈可能性を考慮し、30項目5因子構造(累積寄与率57%： $\alpha = .81$ )を採用した。

第1因子は「友達とはおたがいに、心を打ち明け合う(逆転項目)」、「友達とは何でも本音で話し合うようにしている(逆転項目)」など友人と深く関わることを避け、表面的な関係に留まっている内容を示していることから、「表面的関係 ( $\alpha = .89$ )」因子とした。第

2因子は「友達からどう見られているか気になる」、「友達に嫌われないようにしている」など友人への気遣いや楽しく振舞うなどの躁的防衛を示していることから、「気遣い・躁的防衛 ( $\alpha = .83$ )」因子とした。第3因子は「自分が何の為に生きているのか考えこんだことがある」、「自分の気持ちが分からなくなって悩むことがある」など自分自身への関心の程度や内省傾向を示していることから、「内省傾向 ( $\alpha = .78$ )」因子とした。第4因子は「楽しければなんでもいい」、「軽い生き方をしている」など軽い生き方や楽しさを追求する内容を示していることから、「軽薄短小 ( $\alpha = .84$ )」因子とした。第5因子は「自分の都合は考えるが、友達の都合は考えないほうである」、「友達のために、面倒なことに巻き込まれるのは避けたい」など自分の都合で友人と接する内容を示していることから、「自己中心的関係 ( $\alpha = .60$ )」因子とした。

以上5因子30項目からなる尺度を本研究

表1 多次元自我同一性尺度の因子パターン行列

項目内容	因子負荷量			
	I	II	III	IV
<b>I 「自己斉一性・連続性」 (<math>\alpha = .87</math>)</b>				
過去において自分をなくしてしまったように感じる*	<b>0.854</b>	0.018	-0.022	-0.097
いつのまにか自分が自分でなくなってしまうような気がする*	<b>0.801</b>	0.005	-0.013	0.039
過去に自分自身を置き去りにしてきたような気がする*	<b>0.779</b>	0.012	-0.082	0.008
今のままでは次第に自分を失っていってしまうような気がする*	<b>0.767</b>	0.195	0.058	-0.071
「自分がない」と感じることもある*	<b>0.516</b>	0.059	0.277	-0.003
<b>II 「心理・社会的同一性」 (<math>\alpha = .83</math>)</b>				
現実の社会の中で、自分らしい生活が送れる自信がある	0.101	<b>0.780</b>	-0.059	0.042
現実の社会の中で、自分らしい生き方ができると思う	0.114	<b>0.776</b>	-0.106	0.059
現実の社会の中で、自分の可能性を十分に実現できると思う	0.052	<b>0.696</b>	0.094	-0.049
<b>III 「対自的同一性」 (<math>\alpha = .78</math>)</b>				
自分がどうなりたいたいかはっきりしている	-0.188	0.303	<b>0.683</b>	-0.035
自分が何を望んでいるのかわからなくなることがある*	0.322	-0.201	<b>0.623</b>	0.063
自分が望んでいることがはっきりしている	-0.136	0.263	<b>0.586</b>	-0.017
自分が何をしたいのかよくわからないと感じるときがある*	0.257	-0.230	<b>0.562</b>	0.053
自分のすべきことがはっきりしている	-0.114	0.363	<b>0.547</b>	-0.067
<b>IV 「対他的同一性」 (<math>\alpha = .79</math>)</b>				
自分のまわりの人々は、本当の私をわかっていないと思う*	-0.035	0.107	-0.167	<b>0.780</b>
人に見られている自分と本当の自分は一致しないと感じる*	-0.150	-0.091	0.055	<b>0.733</b>
本当の自分は人には理解されないだろう*	0.157	-0.030	0.085	<b>0.602</b>
人前での自分は、本当の自分ではないような気がする*	0.128	0.117	0.143	<b>0.558</b>
因子間相関		II	III	IV
	I	0.205	0.262	0.632
	II		0.535	0.250
	III			0.232

\*は逆転項目

における友人関係尺度とした (表 2 参照)。

(3) 集団への関わり方尺度の因子構造

本尺度の因子構造を検討するため、全 18 項目に対して主因子法、プロマックス回転による因子分析を行った。因子負荷量、40 以上であること、複数の因子に、30 以上の負荷がまたがっていないこと、因子の解釈可能性を考慮し、14 項目 3 因子構造(累積寄与率 60% :  $\alpha = .86$ ) を採用した。

第 1 因子は「仲間に伝えたいことは、はっきり言える」、「自分の考え・価値観はきちんと仲間に主張できる」など仲間に対して自分主張を行い、存在感を示していることから、「自己主張・存在感 ( $\alpha = .82$ )」因子とした。第 2 因子は「他の何より、その活動を優先させている」、「他の仲間と比べると自分はその活動にのめり込んでいるほうだ」など活動に力を入れて取り組む内容を示していることから、「活動への傾倒 ( $\alpha = .80$ )」因子とした。第 3 因子は「仲間の話に耳を傾けようとしている」、「自分とは考え方・価値観などの異なる仲間のことも認められる」など仲間への受容を示していることから、「仲間受容 ( $\alpha = .79$ )」因子とした。

以上 4 因子 17 項目からなる尺度を集団への関わり方尺度とした (表 3 参照)。

2. 友人関係の類型化と各クラスターにおける特徴の検討

(1) 友人関係の類型化の試み

大学生の友人関係にはどのような特徴があるのかを調べるために、友人関係尺度を用いて調査対象者の分類を試みた。友人関係下位尺度における z 得点を変数とした Ward 法によるクラスター分析を行い、クラスターの解釈の明瞭さを考慮し、4 クラスターを抽出した (図 1 参照)。

次に、各クラスターの特徴を明らかにするため、友人関係下位尺度得点の差を 1 要因分

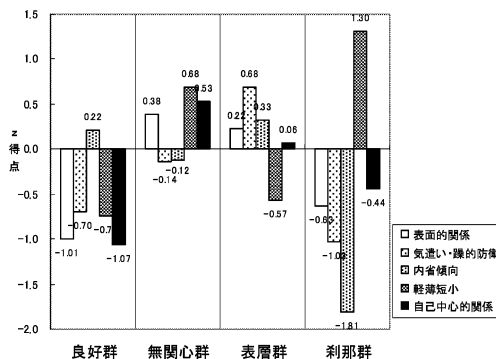


図 1 各クラスターにおける友人関係得点

散分析によりクラスター間で比較した。なお、本研究の多重比較には、すべて Bonferroni 法 (有意水準 5%) を用いた。表面的関係因子において水準間で有意差が見られ ( $F(3, 392) = 53.05, p < .001$ )、多重比較の結果、第 2 クラスター = 第 3 クラスター > 第 1 クラスター = 第 4 クラスターであった (これ以降、多重比較の結果見られた有意差は不等号 (>) で、有意差がないことは等号 (=) を用いて表す)。気遣い・躁的防衛因子において水準間で有意差が見られた ( $F(3, 392) = 66.25, p < .001$ )。多重比較の結果、第 3 クラスター > その他の 3 群、第 2 クラスター > 第 1 クラスター = 第 4 クラスターであった。内省傾向因子において水準間で有意差が見られ ( $F(3, 392) = 46.40, p < .001$ )、多重比較の結果、第 1 クラスター = 第 3 クラスター > 第 2 クラスター = 第 4 クラスター、第 2 クラスター > 第 4 クラスターであった。軽薄短小因子において水準間で有意差が見られ ( $F(3, 392) = 135.95, p < .001$ )、多重比較の結果、第 4 クラスター > 他の 3 群、第 2 クラスター > 第 1 クラスター = 第 3 クラスターであった。自己中心的関係因子において、水準間で有意差が見られた ( $F(3, 392) = 66.41, p < .001$ )。多重比較の結果、第 2 クラスター > 第 3 クラスター > 第 4 クラスター > 第 1 クラスターであった。

以上の結果から第 1 クラスターは、内省傾

表2 友人関係尺度の因子パターン行列

項目内容	因子負荷量				
	I	II	III	IV	V
<b>I 「表面的関係」 (<math>\alpha = .89</math>)</b>					
友達とはおたがいに、心を打ち明け合う*	0.878	-0.085	-0.131	0.012	-0.115
友達とは何でも本音で話し合うようにしている*	0.779	0.035	-0.136	-0.078	-0.118
友達には自分の本当の気持ちを話すことができない	0.743	-0.027	0.237	0.054	0.062
友達には自分の感情を素直に出せない	0.735	0.062	0.132	-0.020	0.108
友達にはありのままの自分を出したくない	0.671	0.016	0.130	0.052	0.086
友達といるとき、自分が無理をしていると感じる	0.605	0.123	0.114	-0.047	0.183
友達とのつながりはうわべだけのように感じる	0.605	0.025	0.097	0.016	0.220
人間の生き方などについて真剣に話し合うことがある*	0.592	0.089	-0.353	0.031	-0.210
友達と精神的に深い関係をもちたい*	0.557	-0.153	-0.301	0.049	-0.010
友達といより一人であるほうが好きなことができてよい	0.456	-0.152	0.148	-0.046	0.258
<b>II 「気遣い・躁的防衛」 (<math>\alpha = .83</math>)</b>					
友達からどう見られているか気になる	-0.046	0.825	0.005	-0.027	0.041
友達に嫌われないようにしている	0.078	0.785	-0.067	-0.010	0.066
友達からの批判が気になる	0.029	0.769	-0.033	-0.058	0.052
楽しい雰囲気になるよう気をつけている	-0.080	0.651	-0.002	0.035	0.063
友人といるときに場を盛り上げることは大切だ	-0.127	0.522	0.043	0.164	-0.119
友達を傷つけないように注意を払っている	0.217	0.501	0.085	-0.079	-0.213
<b>III 「内省傾向」 (<math>\alpha = .78</math>)</b>					
自分が何の為に生きているのか考えこんだことがある	0.158	-0.049	0.744	0.129	-0.048
自分の気持ちが分からなくなって悩むことがある	-0.009	0.038	0.713	0.026	0.047
自分にとって確かなものがほしい	-0.033	0.009	0.633	0.098	-0.081
ものごとを深く考える傾向がある	-0.075	-0.041	0.504	-0.209	-0.078
自分がどんな人間なのか関心がある	-0.180	0.031	0.501	-0.079	-0.059
人には言えない悩みがある	0.266	-0.094	0.493	-0.004	-0.073
自分はものごとに余り悩まない人間だ*	0.092	0.134	0.478	-0.107	-0.224
<b>IV 「軽薄短小」 (<math>\alpha = .84</math>)</b>					
楽しければなんでもいい	-0.064	0.105	0.091	0.923	-0.054
軽い生き方をするようにしている	0.035	-0.018	0.036	0.803	-0.017
軽く生きていく主義だ	0.015	0.037	-0.131	0.708	-0.019
今さえ楽しければよいと思う	0.022	-0.084	0.036	0.613	0.087
<b>V 「自己中心性」 (<math>\alpha = .60</math>)</b>					
自分の都合は考えるが、友達の都合は考えないほうである	0.068	-0.073	-0.180	0.003	0.602
友達のために、面倒なことに巻き込まれるのは避けたい	0.074	0.281	-0.125	0.031	0.518
自分のために、友達を傷つけることがあっても仕方がないと思う	0.150	-0.067	-0.064	-0.027	0.435
因子間相関					
	I	II	III	IV	V
		0.247	0.008	0.053	0.406
			0.379	-0.198	0.154
				-0.330	0.085
					0.268

\*は逆転項目

表3 集団への関わり方尺度の因子パターン行列

項目内容	因子負荷量		
	I	II	III
<b>I 「自己主張・存在感」 (<math>\alpha = .82</math>)</b>			
仲間に伝えたいことは、はっきり言える	0.890	-0.034	-0.071
自分の考え・価値観はきちんと仲間に主張できる	0.874	0.010	0.003
仲間と納得がいくまで討論できる	0.656	-0.055	0.195
いつも仲間の意見に流されてしまっているような気がする*	0.533	-0.002	-0.177
ありのままの自分でいられる	0.465	0.133	0.132
<b>II 「活動への傾倒」 (<math>\alpha = .80</math>)</b>			
他の何より、その活動を優先させている	-0.020	0.728	-0.140
他の仲間と比べると、自分はその活動にのめり込んでいるほう	0.048	0.714	-0.121
目標達成のため、多少の無理ならしてしまう	-0.055	0.699	0.040
自分なりの目標を持って活動に取り組んでいる	-0.018	0.625	0.135
目標が達成されたときの充実感が好きだ	0.036	0.577	0.091
<b>III 「仲間受容」 (<math>\alpha = .79</math>)</b>			
仲間の話に耳を傾けようとしている	-0.041	-0.043	0.853
自分とは考え方・価値観などの異なる仲間のことも認められる	-0.034	-0.039	0.764
仲間から指摘された非は、素直に認められる	-0.056	-0.067	0.696
仲間の気持ちを深く考えようと努めている	0.036	0.217	0.515
因子間相関			
	I	II	III
		0.479	0.508
	II		0.458

\*は逆転項目

向因子は高く、表面的関係因子、気遣い・躁的防衛因子、自己中心的関係因子の得点がともに低い特徴が示された。したがって第1クラスターは友人に対して深い良好な関係を築いていると考えられることから、「良好群 (N=74)」と命名した。

第2クラスターは、表面的関係因子、自己中心的関係因子、軽薄短小因子の得点がともに高く、その他の因子得点は平均的である特徴が示された。友人に対して表面的関係を保ち、友人に対して配慮しないことから無関心であると考えられ、第2クラスターは「無関心群 (N=153)」と命名した。

第3クラスターは、表面的関係因子、気遣い・躁的防衛因子、内省傾向因子がともに高い特徴が示された。友人に対する気遣い・躁的防衛が高く、友人関係は表面的であると考えられることから、「表層群 (N=144)」と命名した。

第4クラスターは、表面的関係因子、気遣い・躁的防衛因子、自己中心的関係因子、内省傾向因子の得点がともに低く、軽薄短小因子の得点が高い特徴が見られた。深く本音で関わる友人関係をもつが、内省傾向が低く、軽い生き方や楽しさを追求していると考えられ、「刹那群 (N=25)」と命名した。

(2) 友人関係の種類と自我同一性、社会的スキルの関連

友人関係尺度の種類と自我同一性との関連を明らかにするために自我同一性下位尺度得点について、友人関係のクラスター間で1要因分散分析により比較した (図2参照)。

その結果、自己斉一性・連続性因子において水準間で有意差が見られた ( $F(3,392) = 8.36, p < .001$ )。多重比較の結果、良好群=刹那群>無関心群=表層群であった。心理・社会的同一性因子において水準間で有意差が見られ ( $F(3,392) = 7.72, p < .001$ )、多重比較の結果、良好群=刹那群>無関心群=表層

群であった。対自的同一性因子において有意差が見られ ( $F(3,392) = 4.41, p < .01$ )、多重比較の結果、刹那群>無関心群であった。対他的同一性因子において有意差が見られ ( $F(3,392) = 14.68, p < .001$ )、多重比較の結果、良好群=刹那群>無関心群=表層群であった。

次に、友人関係の種類と社会的スキルとの関連を明らかにするために、社会的スキル尺度について友人関係のクラスター間で1要因分散分析によって検討した結果、水準間で有意差が見られた ( $F(3,392) = 4.90, p < .01$ )。多重比較の結果、刹那群>無関心群=表層群であった (図3参照)。

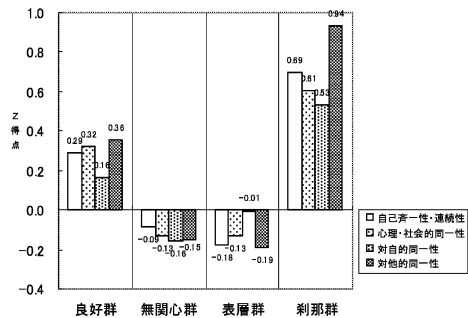


図2 各クラスターにおける多次元自我同一性得点

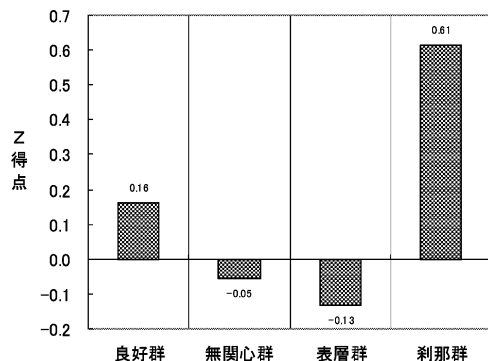


図3 各クラスターにおける社会的スキル得点

### 3. 集団活動の参加および種類に関する検討

#### (1) 集団活動への参加と自我同一性および社会的スキルとの関連

集団活動への積極性の程度を問う質問項目において、「やや消極的」もしくは「非常に消極的」を選択した41名を除外し、集団活動に積極的に関与している280名および集団活動に不参加である75名を対象に分析を行った。集団活動に参加している者と不参加者の間に、多次元自我同一性得点および社会的スキル得点に差がみられるかどうかを検討するためにt検定を行った。その結果、多次元自我同一性得点 ( $t(353) = -1.41, n.s.$ ) および社会的スキル得点に水準間で有意な差は見られなかった ( $t(353) = -1.31, n.s.$ )。

#### (2) 集団活動の種類と自我同一性および社会的スキルとの関連

集団活動の種類は、「学内の部活動・サークル(N=118)」、「学外のサークル・習い事(N=21)」、「アルバイト(N=119)」、「ボランティア・その他(N=22)」と「不参加(N=75)」であった。集団活動の種類によって、自我同一性下位得点および社会的スキル得点に差がみられるかを検討するために、1要因分散分析により集団活動の種類間で比較した。その結果、自我同一性得点 ( $F(4, 350) = 0.80, n.s.$ ) および社会的スキル得点 ( $F(4, 350) = 1.66, n.s.$ ) において水準間に有意な差は見られなかった。

### 4. 集団への関わり方の類型化と各クラスターにおける特徴の検討

#### (1) 集団への関わり方の類型化の試み

大学生の集団への関わり方にはどのような特徴があるのかを調べるために、集団への関わり方尺度を用いて調査対象者の分類を試みた。集団への関わり方下位尺度におけるz得点を変量としたWard法によるクラスター分析を行い、クラスターの解釈の明瞭さを考

慮し、3クラスターを抽出した(図4参照)。

次に、各クラスターの特徴を明らかにするために、集団への関わり方尺度の下位尺度得点の差を1要因分散分析によりクラスター間で比較した。その結果、自己主張・存在感因子において水準間で有意差が見られた ( $F(2, 318) = 197.45, p < .001$ )。多重比較の結果、第3クラスター > 第1クラスター > 第2クラスターであった。活動への傾倒因子において水準間で有意差が見られた ( $F(2, 318) = 192.16, p < .001$ )。多重比較の結果、第1クラスター > 第2クラスター = 第3クラスターであった。仲間受容因子において水準間で有意差が見られ ( $F(2, 318) = 61.69, p < .001$ )、多重比較の結果、第1クラスター > 第2クラスター = 第3クラスターであった。

以上の結果から、第1クラスターは活動への傾倒因子および仲間受容因子の得点が高く、自己主張・存在感因子の得点は平均的という特徴が見られた。集団活動に積極的に取り組むと考えられたことから、第1クラスターは「積極群(N=116)」と命名した。

第2クラスターは、自己主張・存在感因子、活動への傾倒因子、仲間受容因子の得点がすべて低い特徴が見られた。集団活動に対して全般的に消極的であると考えられることから、第2クラスターは「消極群(N=170)」と命名した。

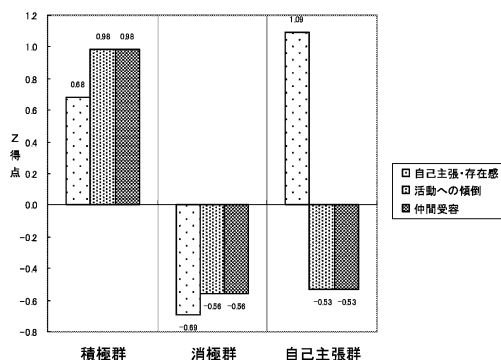


図4 各クラスターにおける集団への関わり方得点



第3クラスターは、自己主張・存在感因子の得点が高く、活動への傾倒因子、仲間受容因子の得点がともに低い特徴が見られた。よって、活動への取り組みや仲間の受容の程度は低いが自己主張は行うと考えられることから、「自己主張群 (N=35)」と命名した。

(2) 集団への関わり方の類型と自我同一性、社会的スキルの関連

集団への関わり方尺度の特徴と自我同一性との関連を明らかにするために、自我同一性得点について、集団への関わり方クラスター間で1要因分散分析により比較した(図5参照)。その結果、自己斉一性・連続性因子 ( $F(2,318)=2.33, n.s.$ ) 以外の3因子において有意差が見られた。心理・社会的同一性因子において水準間で有意差が見られ ( $F(2,318)=19.92, p<.001$ )、多重比較の結果、自己主張群>積極群>消極群であった。対自的同一性因子において水準間で有意差が見られ ( $F(2,318)=5.70, p<.01$ )、多重比較の結果、積極群=自己主張群>消極群であった。対他的同一性因子において水準間で有意差が見られ ( $F(2,318)=3.97, p<.05$ )。多重比較の結果、自己主張群>消極群であった。

次に、友人関係尺度の特徴と社会的スキルとの関連を明らかにするために、友人関係のクラスター間で、社会的スキル得点の差を1要因分散分析によって比較した結果、水準間で有意差が見られ ( $F(2,318)=29.37, p<.001$ )、多重比較の結果、積極群・自己主張群>消極群であった(図6参照)。

【考察】

1. 各尺度の因子構造

(1) 多次元自我同一性尺度の因子構造

本研究で使用した多次元自我同一性尺度は「自己斉一性・連続性」、「心理社会的同一性」、「対自的同一性」、「対他的同一性」の4因子で

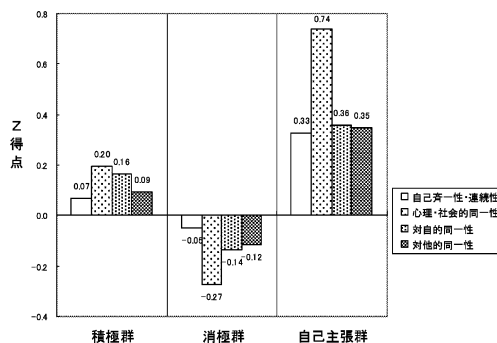


図5 各クラスターにおける多次元自我同一性得点

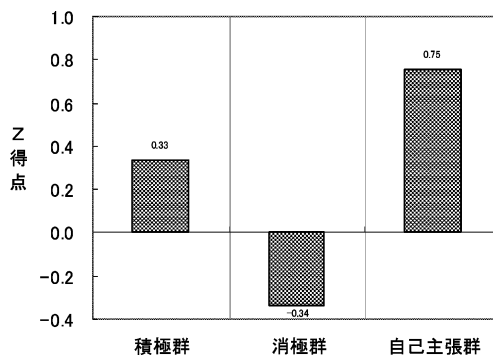


図6 各クラスターにおける社会的スキル得点

構成されることが明らかになった。本研究において得られた結果は、谷(2001)が示した4因子構造を支持するものであり、同様の解釈が適当と考えられる。

(2) 友人関係尺度の因子構造

本研究で作成された友人関係尺度は、「表面的関係」、「気遣い・躁防衛」、「内省傾向」、「軽薄短小」、「自己中心的関係」の5因子で構成されることが明らかになった。

因子間相関では、「表面的関係」因子と「自己中心的関係」因子との間には比較的強い正の関連(0.41)が見られた。このことは表面的な友人関係と自己中心的な友人関係が関連することを示唆しており、友人と心理的な距離を置く特徴から2つの因子が関連していることが推測される。また、「気遣い・躁防衛」

因子と「内省傾向」因子との間にそれほど強くはないが、正の関連 (0.38) が見られた。岡田 (1993) は、内省傾向が高い者ほど対人場面での他者の目に映る自分の姿を気にして対人不安が高まると述べており、内省の高まりによって他者への気遣いが高まると思われる。

### (3) 集団への関わり方尺度の因子構造

本研究で使用した集団への関わり方尺度は「自己主張・存在感」、「活動への傾倒」、「仲間への受容」の3因子で構成されることが明らかになった。本研究において得られた結果は、宮下 (1998) が示した3因子構造を支持するものであった。

## 2. 友人関係の類型

本研究において、青年の友人関係のあり方として「良好群」、「無関心群」、「表層群」、「刹那群」の4類型が見出された。それぞれの群について特徴をまとめることとする。

はじめに、「良好群」は、友人と深く本音で関わり、友人に対して自己中心的な関わりを行わないように注意を払い、互いに尊重しあう友人関係である。この群は自己や物事に対して真剣に考える傾向も高く、中園・野島 (2003) の「本音群」、橋本 (2000) の「積極群」に類似する群である。

次に、「無関心群」は、友人に対して本音で接することなく、関係が深まるのを避け、さらに自己中心的な関わりをする傾向が示された。中園・野島 (2003) や橋本 (2000) は、友人からどう見られているかが気にならず、場を盛り上げるようなことをしない群を「無関心群」としているが、本研究で得られた「無関心群」は友人に対する配慮や気遣いが見られる点で異なっていた。「無関心群」は、友人関係との関わりを持つことは可能だが一人でいることを好む群ではないかと推察する。堀・松井 (1981) は、高校生の友人関係を「友

人との心理的距離」と「交際に気を遣う」の2側面をもとに「つくす交友」「とけあう交友」「クールな交友」「なげやりな交友」の4類型に分類を行った。そのうち、友人との距離を大きくとる「クールな交友」群は、他の交友類型に比べ、精神的に疲れていると指摘している。「クールな交友」と本研究における「無関心群」は類似しており、対人関係を円滑に進めることに伴い、気疲れを感じているため、友人と距離を保つことで精神的な安定化をはかっていると思われる。

「表層群」は、友人に対して本音で接することなく、友人からの評価懸念が高く、気遣いをする群であった。上野ら (1994) の友人との心理的距離が大きく同調的である「表面群」と類似した友人関係であるだろう。上野らは「表面群」について、公的自己意識が高く、劣等感を強く感じているとしており、本研究で得られた「表層群」も同様に自分の生き方などを真剣に考え、自己に対する関心は高い特徴を示していた。しかし、自己中心的関係が高い特徴において中園ら (2003) の「深化回避群」とは異なっていた。つまり、「表層群」の青年は、自己意識が高く敏感な自分を守るために友人に対して自己中心的な振る舞いをしているのではないかと考えられる。

最後に「刹那群」は、享樂的生き方を追求し、自分自身についてあまり深く考えない現代的な考え方をもち群であった。友人とは本音で関わり、自己中心的な行動もしないことから、中園 (2003) の「本音交流群」と類似していると思われるが、友人と一体化し、楽しいことや軽く生きることを追及するという特徴が異なっている。上野ら (1994) は、仲間と同調的で心理的距離の近い特徴をもつ群を「密着群」として抽出し、身近な狭い周囲の世界に埋没し、私生活を楽しもうとする私生活主義を有していると明らかにしている。享樂的な生き方を追及するという点で、上野らの「密着群」と「刹那群」には共通した特

徴が見られるだろう。

以上のことから本研究では、友人と深く本音で関わる2群（良好群と刹那群）と浅く表面的に関わる2群（無関心群と表層群）が得られた。4群の人数の割合は、刹那群25名、良好群74名、表層群144名、無関心群153名であり、刹那群が最も少なく人数のばらつきが見られた。刹那群の人数が顕著に少なかったことから、クラスター数を3に設定してクラスター分析を行った結果、「刹那群」は「無関心群」に含まれた。したがって「無関心群」の中でも良好な友人関係を築いている者が「刹那群」に分かれ、「無関心群」の表面的友人関係や自己中心的関わりが中園ら（2003）の無関心群よりも高く算出されたのではないかと推測される。

次に、上野ら（1994）の同調傾向と心理的距離の2側面を踏まえて考えてみたい。本研究では、自己中心的行動が高く、他者と表面的な関わりを持つとする「無関心群」と「表層群」によって全体の8割を占める結果が見られ、他者と心理的な距離をもって関わろうとする現代青年の友人関係のあり方の特徴が見出された。しかし、「心理的距離の取り方はむしろ自律性の高さを示しており、友人と心理的距離を置くことが必ずしも否定的な意味をもつとは限らず、むしろ発達的に望ましい面を有している（上野、1994）」と理解することもできる。本研究において、自己中心的関係とは友人に対して配慮が足りないこと、自己防衛手段ではないかと考えてきたが、「表層群」と「無関心群」と合わせて全体の8割を占めていることから、青年にとって自己中心的に思われる程度に率直で、自己の権利を主張していることが本来の姿でいられるということと適応的なものかもしれない。

### 3. 友人関係4類型における自我同一性、社会的スキルの特徴

友人と深く本音で関わる者（良好群・刹那

群）は、自我同一性の感覚が高かったことから、自我同一性を確立している青年は友人と深く積極的に関わり、親密な関係を持っているというこれまでの研究を支持する結果となった。全体では、「刹那群」が最も自我同一性の感覚が高かったことから、物事を深く考えず、自由人である「刹那群」は青年期の危機を乗り越えて安定した状態にあると推測される。

次に、社会的スキルでは「刹那群」が、「無関心群」および「表層群」よりも有意に社会的スキルが高かったことから親密な友人関係をもつ青年は、社会的スキルが高いと言える。しかし、現代青年特有の社会的スキルがあることが推測されるため、それらの把握と客観的な測定に関しては今後の課題であろう。

ところで、橋本（2000）は、社会的スキルがすべての否定的対人関係の抑制に有効ではないことを示唆している。つまり、「無関心群」のように個人が友人関係への動機付けが低い場合、社会的スキルの習得が有効でないと思われる。したがって無関心という特徴を持つ青年には友人関係の気疲れを減らすための動機づけレベルからの対応が必要であると思われる。

### 4. 集団活動の種類や参加による特徴

最も力を入れている集団活動として、「学内の部活動・サークル」と「アルバイト」が同程度の割合を占めていた。宮下（1995）は大学生の集団活動には、「スポーツ」や「教養・趣味」が圧倒的に多く、「ボランティア」などの社会とのつながりを重視する活動への加入率が極めて少ないとしているが、本研究では学生の3割がアルバイトという形で社会と携わっていた。宮下（1997）は、集団活動の種類と自我同一性の関連について調べ、学外の集団に属する者は自我同一性が高いという結果を示している。しかし、本研究において学内および学外の違いが見られなかった理由と

して、福祉系のサークルが多かったこと、部活動・サークル自体が社会と比較的つながりを持ち、大学内外の交流が盛んなためではないかと考えられる。

### 5. 集団への関わり方の類型

集団への関わり方尺度を用いて、「積極群」「消極群」「自己主張群」の3群に分類された。「積極群」は、仲間と意思疎通を図りながら、活動に対して積極的に取り組む特徴がある。「消極群」は、仲間とのコミュニケーションを行わず、活動自体にも消極的で、所属しているだけで活動に関わっていない群である。最後に「自己主張群」は、集団内で積極的に発言し、自分らしくいられるが、活動や仲間との関わりが消極的な群である。

西平(1988)は、個人の集団への所属感の深さを心理的なコミットがなく、所属しているだけである状態の「形式的で義務的な所属」、自発的な行動は行わないが、協力的である「参加的な集団所属」、積極的に集団の追及する目標と自分自身の欲求を一致させようと努力する「自発的に役割を果たす集団所属」、自己と集団との同一視がおこるほどの強い一体感をもつ「集団と自己との連帯感をもつ集団所属」の4段階に分けている。このことをふまえると、「消極群」は第1段階の義務的な所属であり、「自己主張群」は第2段階の参加的な所属、「積極群」が最終段階の一体感をもつ所属ではないかと推測される。

### 6. 集団への関わり方3類型における自我同一性、社会的スキルの特徴

集団への関わり方の3類型による自我同一性下位尺度得点の差を検討したところ、心理・社会的同一性因子、対他的同一性因子、対自的同一性因子の3因子において、「積極群」および「自己主張群」が「消極群」よりも高かった。このことから、集団活動への積極的な参加や意思疎通は自我同一性の確立と

関連しており、話し合いを重視する青年よりも、活動に専念し、仲間を認め合うという総合的な活動を行う青年の自我同一性が高いことが示され、集団に所属しているだけでは自己の発達が促進されにくいことが明らかとなった。

また、社会的スキルについては「積極群」および「自己主張群」が、「消極群」よりも得点が高いことから、青年が集団活動において自己主張や討論などの積極的な関与を続けることによって社会的スキルが高まるのではないかと推測される。

### 【まとめと今後の課題】

本研究では、青年期後期における大学生の友人関係および集団への関わり方を明らかにした上で、自我同一性の感覚および社会的スキルとの関連の検討を行った。新たに作成した友人関係尺度は「表面的関係」、「気遣い・躁的防衛」、「内省傾向」、「軽薄短小」、「自己中心的関係」の5因子によって構成され、「良好群」、「表層群」、「無関心群」、「刹那群」の4群が見出された。友人と深く本音で関わる「良好群」および「刹那群」は自我同一性の感覚が高いこと、楽しさ志向の強い「刹那群」が最も社会的スキルが高いことが示された。

第二に、集団への参加および活動の種類によって自我同一性および社会的スキルの程度に差は見られなかったが、関わり方の質において活動への積極的な関与を続けることや仲間を認め合うなど総合的に関わる者は、自我同一性の感覚や社会的スキルが高いことが示された。さらに全体の8割の学生が何らかの集団に所属しており、大学生は活動の種類に関係なく集団活動という枠内で、様々な経験を通して成長する実感を持ち、仲間や社会との関わりから精神的な安定を得ていることが推測された。つまり、友人や集団との親密かつ率直な関係は、自我同一性の確立に不可

欠であると同時に、自我同一性の確立も良好な友人・集団関係の基盤になり得るといふ両者の補完的な関係が見られたと言えるだろう。

最後に、本研究では友人関係のあり方について「最も親しい同性の友人」と限定したため、落合・佐藤（1996）の「自分が関わろうとする相手の範囲」については明らかにすることが出来なかった。また、対象者の男女の割合に偏りが見られたため、詳しい性差の検討は行わなかったが、大学生の交友関係の範囲や性差の検討を行うことが今後の課題であろう。

## 付記

本論文は2007年度北星学園大学社会福祉学部福祉心理学科において卒業論文として作成したものに加筆・修正したものである。なお、本論文の一部は第55回大会北海道心理学会（2009）で発表した。

## 謝辞

本論文を作成するにあたり、御指導いただきました清水信介先生に心よりお礼申し上げます。また、本論文をまとめるにあたり、御指導いただきました田澤安弘先生に深く感謝いたします。

## 引用文献

- エリクソン、E. H. 1959 小此木啓吾（訳）自我同一性、誠信書房。（*Identity and the lifecycle. New York. International Universities Press*）
- 岡田努 1993b 現代青年の友人関係に関する考察 青年心理学研究、5、43-55。
- 落合良行・佐藤有耕 1996 青年期における友達とのつきあい方の発達の变化 教育心理学研究、44、55-65。
- 橋本剛 2000 大学生における対人ストレスイベントと社会的スキル・対人方略の関連 教育心理学研究、48、94-102。
- J. クロガー 2005 榎本博明（編訳）アイデンティティの発達—青年期から成人期—
- 近田輝行 1983 自我同一性と親密性—後期青年の同輩集団と自己確立をめぐる— 立教大学心理学研究年報、26、36-46。
- 谷冬彦 2001 青年期における同一性の感覚の構造：多次元自我同一性尺度（MEIS）の作成 教育心理学研究、49、265-273。
- 中園尚武・野島一彦 2003 現代青年における友人関係への態度に関する研究 九州大学心理学研究、4、325-334。
- 難波久美子 2003 青年期後期の目的のある集団に対する態度について：集団で過ごすために重要なことを手がかりに 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 心理発達科学、50、243-250。
- 難波久美子 2004 日本における青年期後期の友人関係研究について 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 心理発達科学、51、107-116。
- 西平直喜 1988 青年心理研究の当面する課題 西平直喜・久世敏雄（編）青年心理学ハンドブック、3-42。
- 松井豊 1990 友人関係の機能（斉藤耕二・菊池章夫編著）社会化の心理学ハンドブック川島書店、283-296。
- 宮下一博 1998 青年の集団活動への関わりおよび友人関係とアイデンティティ発達との関連 千葉大学教育学部研究紀要教育科学編、46、27-34。
- 宮下一博・大野朝子 1997 青年の集団活動への参加とアイデンティティ 千葉大学教育学部研究紀要 教育科学編、45、7-14。
- 上野行良・上瀬由美子・福富護・松井豊 1994 青年期の交友関係における同調と心理的距離 教育心理学研究、42、21-28。